The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	龍野文庫蔵懐徳堂関係文献簡介（一）
Author(s)	井上，了
Citation	懐徳堂センター報. 2004, 2004, p. 105-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『懐徳堂センター報』二〇〇四　（大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター　二〇〇四年二月二九日発行）

龍野文庫蔵懐徳堂関係文献簡介（一）

井上了

「龍野文庫」とは、龍野市立歴史文化資料館（兵庫県龍野市）に架蔵されている五千冊以上の貴重資料等の総称である。

同文庫の蔵書目録としては『龍野文庫図書目録』（龍野市教育委員会編、龍野市立歴史文化資料館発行、一九九四年。以下『目録』と称す）が刊行されているが、同『目録』の記載はきわめて簡潔であり、多くの誤りも認められる。同文庫は閉架式で、閲覧に際しては事前に希望資料を明記した書面にて許可を申請せねばならないのだが、『目録』のみによって必要な資料を選定することは困難であろう。たとえば『目録』には、『逸史』の明和七年刊本や寛政十一年刊本が著録されており、また抄本『七経雕題略』も著録されているが、前者は抄本の誤りであり、後者は七経すべてではなく論・孟・庸のみの抄本である。『目録』によってはこれらの資料の詳細を知り得ないことから、結果的に無意味な閲覧請求が行われることが予想され、ひいては資料の劣化も懸念される。

いま、同文庫が架蔵する懐徳堂関係の文献から若干を選び、その概略や、必要であれば内容についてごく簡単に紹介して研究者の参考に供したい。本報告を手がかりとして、これらの資料に関する研究が進展すれば幸いである。

なお龍野市歴史文化資料館には、資料の閲覧に際して格別のご配慮を頂いた。記して感謝する次第である。

『中井履軒　履軒幣帚』　目録一〇〇頁（XII）12

和中本。四冊。無格無罫九行二十字抄本。ただし第一冊のみ十行二十字。中井柚園抄本。三木家旧蔵一二号。

『目録』は外題に従い「履軒幣帚」「四冊」とするが、内題に従うならば『弊帚（前編）』二冊・『弊帚続編』・『弊帚季編』各一冊となる。

第一冊の外題は「履軒弊帚　元」。内題は「履軒弊帚」。末尾に「弊帚畢」の記。その篇目は下記の通り。「自序」・「射説」・「雑説」・「繑斎説」・「仰斎説」・「寓言」・「祭食河豚死者文」・「問目二道」・「擬問韓客」・「跋奇石図」・「題鍾馗図（「子之～」）」・「題猴図」・「題桃源図」・「小園記」・「小園序」・「送水守節帰赤穂序」・「贈石原有文序」・「記釣遊」・「記阿王事」・「神武記」・「粥蕎麺者伝」・「伯夷伝」・「程婆伝」・「忠孝両全論」・「高帝還定三秦論」・「明大祖論」。

第二冊の外題は「履軒弊帚　亨」。内題は「弊帚前編」。内題の下に「出于続編省十四編」の注記。末尾に「弊帚続編　有写本者今不煩書七十一編」の記。その篇目は下記の通り。「弊帚前編目録」（射説より独知剣記まで）・「弊帚続編目録」（文帝論より擬符堅喩江南檄まで）・「弊帚季編」（目録、姓氏断より濮議まで）・「送寿安還郷序」・「舟工招鬼表」・「龍海寺鐘銘并序」・「秦二世烏有詔」・「入江円了翁碣」・「題鍾馗図」（「陰間～」）・「題画」（鶴）・「題墨竹」・「黒弱論」・「贈無頼子」・「黒弱余論」・「伐刑論」・「国計論」・「独知剣記」。

第三冊の外題は「履軒弊帚　利」。内題は「弊帚続編」。末尾に「文政庚寅夏

六月朔中井環敬書」の記。その篇目は下記の通り。「弊帚続編序」・「文帝論」・「譲国論」・「嵇叔夜論」・「義貞論」・「甲越論」・「過秦論駁議」・「東周記」・「唐氏廟議」・「復讐議」・「浚河茅議」・「万鍾弁」・「原祭」・「愛茗説」・「無求説」・「不達軒記」・「埋飲器記」・「永正刀記」・「華胥国記」・「顕微鏡記」・「楽甌記」・「天楽楼記」・「偸語欄戒約」・「大畜堂記」・「烏有園記」・「扶桑匣記」・「委奴印記」・「錫類記」・「孝三伝」・「卯谷伝」・「贈夢大夫序」・「送源教授序」・「送司馬皮虎入関序」・「琵琶清音序」・「卜居詩巻序」・「書流水詩稿序」・「書象外恠軸後」・「題楠公訓子序図」・「題欹器図」・「題倒載図」・「題訪戴図」・「題南極老人図」・「題橐駝図」・「題瞶谷図」・「題朽鼓図」・「題鍾馗像」・「題画虎」(「履軒幽人〜」)・「題鵂鶹図」・「題甘棠図」・「題仙像」・「題夢蝶図」(「周之夢為〜」)・「題画装軸」・「題画虎」(「天楽道人〜」)・「題三顧図」・「題千窟戦図」・「題夢蝶図」(周之覚之〜)・「題画蝶」・「題神農像」・「象外画像賛」・「題簞扇」・「鴻池稲荷祠碑」・「祭棄児文」・「専問対」・「簡笠」・「問書画令」・「戯簡藍水処士」・「雑筆」・「擬弁」・「擬策」・「擬与留学生阿倍仲麻呂書」・「録此書簡友人」・「得友人報再簡」・「擬疏」・「擬符堅喩江南檄」。

第四冊の外題は「履軒弊帚 貞」。内題は「弊帚季編」。末尾に「文政十二年己丑二月春分中井環書」の記。その篇目は下記の通り。「姓氏断」・「混一論」・「封建論」・「封建後議」・「封建余論」・「美政論」・「閹人論」・「拇刑議」・「梁武論」・「興議」・「濮議」。

本資料は、第一冊の末尾に「弊帚 畢」とあり、第二冊の冒頭に目録を有するなどの混乱がある。特に第二冊の内容は他の『弊帚』諸本に対して特徴的であり、今後、懐徳堂本や新田文庫本などとの対照・研究が進められるべきであろう。

なお柚園は文政十三年にも『履軒弊帚』を抄写しており、こちらは現在大阪府立中之島図書館に架蔵されている(和中抄本三冊、『履軒弊帚』・『弊帚続篇』・『弊帚季篇』、請求記号「甲和一四八」、受入番号「二四一四八」。『大阪府立図書館蔵稀書解題目録和漢書の部』一九九頁)。中之島図書館本には目録位置に関する上記の混乱は認められず、また「贈無頼子」・「録此書簡友人」・「得友人報再簡」を欠く。これらの相違は、柚園による『弊帚』整理の経過を示すものと考えられよう。また中之島図書館蔵『弊帚季編』は、『日本儒林叢書』排印本『弊帚季編』が底本に用いたという「無窮会所蔵本」の底本と考えられる(「文政十三年庚寅中秋寒露節中井環謹書」の識語と「環」・「君玉」の印記。ただし中之島本は「奎運堂」印記を増す)。

『弊帚』　目録四七頁（8）29

和中本。四冊。抄本。抄者未詳。

外題は三木家旧蔵一二号本(上述)と異なり、各々「弊帚」・「弊帚前篇」・「弊帚続篇」・「弊帚季篇」とする。

内容はほぼ三木本に一致しており、三木本と同系統のテキストと思われるが、三木本に見えない若干の校正が施されている。

『目録』は抄写時期を「享和〜文化」とするが、自序に誤られたものか。抄写時期が三木本より遅れるものであれば、文政以降の抄本となる。

『履軒古韻』　目録四九頁（8）66

和小本。一冊。無格無罫八行二〇字抄本。抄者・時期とも未詳。小西文庫(龍野藩の読書指南などを務めた小西家の旧蔵書)。

内題「履軒古韻」。外題なし。抄写年は不明。目録は「明和六年」抄本とするが、これは序文の年代である。

なお『履軒古韻』の自筆本は懐徳堂文庫に架蔵されており、本資料は自筆本に対して若干の異同を有すが、おおむね誤写と見なせる範囲内に収まる。

本資料は収袗抄本であり、実用的な目的で作成されたものであろう。

『逸史』　目録四二頁（3）72

和大本。十三冊。精抄本。抄者・時期とも未詳。本間文庫旧蔵。ただし『目録』は小西文庫本とする。なお『逸史』については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二-二（平成一四年）の解題を参照。

『逸史』の献上本（正本）は現在 内閣文庫に架蔵されており、懐徳堂文庫に架蔵されている竹山自筆本『逸史』は献上本と同時に作成された副本とされる。この他にも懐徳堂文庫には複数の『逸史』が伝えられており、うち竹山副本に最も近いのは受入番号九九三九の抄本であるが、これと本間文庫本（本資料）とは酷似しており、同手の抄に出るかと思われる葉も少なくない。

本間文庫本は、懐徳堂文庫九九三九抄本と同様に、懐徳堂にて印刷された『逸史』専用の罫紙を用いる。すなわちこれらは懐徳堂の内部か、すくなくとも懐徳堂ときわめて近い環境において作成された抄本であることは間違いない。しかし、竹山副本・本間文庫本とも懐徳堂にて印刷された題箋を用いているのに対し、九九三九抄本は書き題箋を用いる。またこれら三者の間には細部の相違が見られるが、おおむね本間文庫本のほうが竹山副本に近く、これらと九九三九抄本との間にはやや大きな開きがある。要するに、懐徳堂文庫九九三九抄本よりも本間文庫本のほうが、竹山副本に近い位置を占めているように思われるのである。

九九三九抄本は一般に蕉園抄本とされているが、九九三九抄本・本間文庫本とも、抄写年や抄者を示す記載を持っておらず、これらの先後関係は未詳である。むしろ本間文庫本のほうが九九三九抄本に先行する可能性も指摘されよう。しかしむろん、本間文庫本と九九三九抄本との間に親子関係を想定すべき必然性はなく、むしろこれらが同一の元資料（竹山副本か）から抄写された兄弟関係にある可能性も高いと考えられる。

なお、目録四二頁（3）73の『逸史』は寛政十一年刊本ではなく不明抄本（好古文庫旧蔵、小西文庫）、同じく74の『逸史』は天保十三年刊本（『目録』によると股野家旧蔵。「契空普明勝山滴翠所蔵」印を有す）である。

『竹山書説』　目録三九頁（2）7

和中本。一冊。無格無罫一一行二一字抄本。仮綴。小西文庫。

内題なし。『目録』の書名は外題「竹山書説」によると思われるが、丁間に挟込されている旧題箋には「竹山先生書説 下」とある。

本資料は『尚書』に対する詳細な注釈であり、まず該当する『尚書』の条を示し、続けて自説を示すという体裁をとる。ただし塗抹・訂正の跡や補紙などが認められ、未定稿の段階のものと思われる。

竹山の『尚書』注釈としては、懐徳堂文庫に自筆本『尚書管見』が架蔵されている。本資料は『尚書管見』のそれと一致する説も多く見られるが、量的に『尚書管見』に対して数倍しており、竹山の経説を考えるうえで、きわめて重要な資料である。

なお本資料の旧題箋には「竹山先生書説 下」とあり、内容としても泰誓上より秦誓すなわち「周書」部分にとどまる。龍野文庫『蔵書籍目録』には「二冊」とあり、上冊が明治以降に失われたものであろう。

『詩経集註』　目録二頁（1）39

和中本。八冊。享保九年今村八兵衛刊本。小西文庫。

内題は「詩経集伝」だが、外題は「詩経集註」とする。

中井竹山『詩断』の説を欄外などに抄写しており、資料名はむしろ『詩断』とすべきか。なお『詩断』については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二

一二(平成一四年)の解題を参照。

懐徳堂文庫蔵の竹山自筆本『詩断』と対照すると、本資料の抄写は比較的忠実であるが、独自の判断による省略や改変も若干認められる。下記の『竹山詩経解』とともに、龍野における竹山説の受容を示す資料である。

『竹山詩経解 上中下』　目録三九頁（2）1

和中本。三冊。無格無罫一一行二一字抄本。仮綴。抄者未詳。小西文庫。

『目録』の書名は外題による。内題はなし。

竹山『詩断』の説を摘録したもの。

『竹山詩経解 上下』　目録三九頁（2）2

和中本。二冊。左右双辺九行二〇字抄本。抄者未詳。小西文庫。

『目録』の書名は外題による。内題はなし。

竹山『詩断』の説を摘録したもの。ただし上掲の三冊本『竹山詩経解』とは基本的に重複しないようである。『詩断』から本資料を摘録した際に採用されなかった竹山説を別にまとめたものが上掲三冊本であろうか。

『中庸定本』　目録三頁（1）100

和中本。一冊。抄本。仮綴。抄者未詳。小西文庫。

目録の書名は外題による。内題は「懐徳堂校定中庸」「中庸錯簡説」。

「懐徳堂校定中庸」は『中庸懐徳堂定本』と同内容。なお『中庸懐徳堂定本』『中庸錯簡説』については『大阪大学大学院文学研究科紀要』四二-二(平成一四年)の解題を参照。

『中井蕉園 雕蟲篇 同後篇』　目録一〇〇頁（XII）8

『目録』は一点とするが、『雕蟲篇』・『雕蟲後篇』の二点とすべきか。おそらく懐徳堂において三木通深が抄写したものであろう。

(1)『雕蟲篇』

養中堂用紙抄本。一冊。三木家旧蔵八号。

内題「彫虫篇」、外題「雕虫篇 一宵十賦」。

「一宵十賦」の抄本。「播州三木深図書之記」の印記と「弘化三年丙午六月下浣謄 三木深」の記を有す。

(2)『雕虫後篇』

養中堂用紙抄本。一冊。三木家旧蔵八号。

内題「彫虫後篇」、外題「雕虫後篇 後一宵十賦 完」。

「後一宵十賦」の抄本。「与脇子善書」・「再答脇子善書」・「答尾藤学士書」を付す。「播州三木深図書之記」の印記と「弘化三年丙午七月謄 三木深」の記を有す。

『懐徳堂上棟文』　目録一〇〇頁（XII）11

和中本。一冊。左右双辺一〇行二〇字抄本。三木家旧蔵一一号。

外題に「懐徳堂上梁文」とあり、『目録』の書名はこれを採ったものであろう。しかしその内容は蕉園の文集であり、外題は単に首篇の名を録したもの。印記「播州三木深図書之記」を有すが、抄者は未詳。

およそ四十五篇。その篇目は下記の通り。「懐徳堂上梁文」・「雪鶴賦(辛亥十二月朔)」・「羅池帖序(寛政乙卯春)」・「清俗紀聞序(寛政戊午)」・「書中庸定

本後(寛政庚申十二月朔)」・「蘭室集序」・「送白木有常序」・「送津田士文序」・「送巌童子序」・「送林彊骨序」・「送文晁序」・「送伴季玄序」・「送石川成父序」・「夢遊湖記」・「寒濤楼記」・「観螺杯記」・「陶然亭集記(限寸燭光)」・「抱月楼記」・「散亭記」・「益斎記」・「著斎記」・「来蘇亭記(寛政三年)」・「黄裳斎記」・「弁髦斎記」・「陶館記」・「山寿堂記」・「宝刀記」・「古刀記」・「吊楠公文」・「祭人麻呂文(庚戌秋)」・「祭竹里翁文」・「祭渋井子徳文(天明七年)」・「吉田鴻儀墓誌銘(寛政十二年)」・「出師表并序」・「二源論」・「原誇」・「答岩有礼」・「觚不觚義」・「題伯牙破琴図」・「吐握図」・「汝陽王図」・「擬源義経与大江広元書」・「復尾藤博士書」(答尾藤学士書に同じ)・「与脇子善書」・「答中川生書」。

『通語』　目録四二頁（3）76

和中本。三冊。九行二十字抄本。本文は左右双辺、序文は無界無罫。小西文庫。

内題・外題とも『通語』。

本文は江戸末期(天保二年か)の抄。序のみ明治三十五年に刊本から抄。『通語』の抄本は多くが現存するが、いったん本文を抄写した後に刊本『通後』の序を補抄したという本は稀であり興味深い。明治以降にも龍野において懐徳堂に関する学問が継承されていたことを示す、好個の資料と言えよう。

『老子経』　目録七頁（3）35

二冊。延宝二年上村二郎右衛門刊本。小西文庫。

内題「老子鬳斎口義」。外題「増補首書老子経(乾・坤)」。林注本であるが『目録』が「老子経」とするのは、外題に誤られたものか。

一般的な和刻本であり、書き入れの類は認められない。とくに懐徳堂に関わる資料ではないが、『目録』からは欄外書込の有無などを判別できないため、欄外注の類がないことを特に記す。

なお履軒『老子雛題』については、北山文庫抄本や新田文庫抄本などが最近「発見」されつつあるが、依然として原本の所在は不明であり、抄本の分布状況も充分には明らかとされていない。

(本センター非常勤事務補佐員)